



理論社刊

913/街(まち)

早船ちよ(はやふね・ちよ)

理論社/1966年初版

364p/19 cm/B6判

禁無断上演上映放送

街(まち)

一九六六年十二月 第一刷

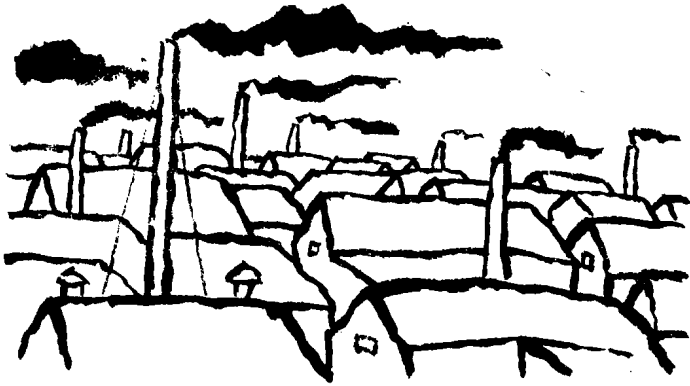
定価五〇〇円

作者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都千代田区神田神保町一の64
発行所 株式会社 理論社

電話東京(三益)六五〇一(代)
振替口座東京九五七三六



はじめに

骨壺 ことごと胸に

妹よ

あなたを探しに 街へいく。

糸の流れ かぼそくも長く

ながく 白壁の繭倉庫

街に ひるの月 あお白く。

頰ほれた黒板塀よに凭よれば

妹よ

絹を吐くあなたの指さきに 蛹の腐臭と

つんつんくる 水虫よけの錯酸。

座繰りが 二十枠。二十枠が

自動繰糸機となつたいまも 妹よ

湖はひかり 胸にかさこそ

冬の壺 鳴る。

——ある墓碑銘

街／もくじ



序章	はじめに／1
1	みっ子の出発
2	水車を踏む蜘蛛
3	三度めのいいこと
4	あねおとうと
5	ガラス戸の城
6	風車のある街
7	ずりおちる
8	カーキいろのあらし
9	しごとを探しに
10	実践によって
11	星凍る
12	三郎

192	153	144	125	116	107	99	77	63	42	23	9	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	---	---

★本書の刊行にあたって／編集部から★

この作品は、もともと作者の処女作として、「文芸首都」「若草」その他に発表された一連の半自伝的作品を土台とし、今回新たに、

第一部／峠（とうげ）

第二部／湖（みずうみ）

第三部／街（まち）

の三部作の長編小説として書きおろされたものである。各巻ごとに独立の内容をそなえてはいるが、全三巻をつうじて、ひとりの働く女性の成長が、その出生の根源から昭和時代をつらぬいて描かれることになっている。

序章 ちさのノート

一九三一年九月十八日。夜十時ごろのことだ。奉天城外の柳条溝りゅうじょうこう、満鉄線路上に、黒い影が、三つ四つ、あらわれた。——それは、関東軍参謀の内意をうけた將校たちであった。

黒い人影は、やがて、高粱畑コウリヤンをわけて消えさった。まもなく、レール上に爆発がおこった。爆発直後の現場を、長春発の急行列車が通過して、何ごともなく奉天駅へすべりこんでいる。爆発は、レールの枕木に痕跡こんせきをとどめる程度の被害でしかなかったのだ。

一時間後。関東軍鉄道守備隊内に配置されていた二十四榴攻城重砲りゅうこうじゅうが、奉天北大営にむけて火を吐き、轟然と吠えだした。

その夜、関東軍は、奉天、長春、公主嶺、四平街など、満鉄沿線のおもな都市で、いっせいに、軍事行動をおこした。すぐ、司令部を旅順から奉天へ移した。「満洲事変」とよぶ、宣戦布告のない、計画された第一段階の戦時態勢へすべりこんでいったのであった。

しかし、そのとき。わたしには、何ひとつ、わかろうはずはなかった。

軍も、政府も、各新聞も、「不拡大方針」をいっているなかで、この柳条溝事件が、いわゆる十五年戦争といわれる、中日戦争—太平洋戦争に発展する発火点になろうなどと、夢にも考えられないことだった。

*

一九三一年九月十八日。満洲事変勃発のその日、わたしの人生は、袋小路へつきあたった。

あくる日。わたしが、TYレーヨン工場を脱出して、京都へ奔ったのは、偶然だったかもしれない。

——街から街へ。露地から、つぎの通りへ。戦争勃発をつげる号外の鈴に追いたたれ、せきたてられて、道を失ってしまった。

*

——そして、この日から、わたしは、（おそらくは、葱^{しのぶ}俊枝や前田せい子、黒木克彦も。妹のみつ子、弟の杉太郎も。父の衆之助、母のはるさえも……、そして、日本じゅうの、ほとんどみんなの人びとがそれぞれに）べつの人生を、歩きはじめることになる。

*

引きかえすことは、できない。曲り角に沿って、ムリ押しに前進させられるのは、いやだ。それは、いやだ。

しかし、袋小路につぐむことは、ぜったいに許されない。

* *
* *

このノートは、去年の使いふるしの日記帳にかきつづける。それは、レーヨン工場にはいったときからのひきつづぎで、大型のルーズリーフ・ノートに、去年のぶんは、ほんのところどころ、二、三行ぐらいしかかいてない。——ということは、一九三〇年、高等小学校を卒業して、はじめて、社会へふみだしたわたしの十六歳が、文字でかきとめられないほど、ゆすぶられていた——それを、まっ白い盲目のページがものがたっているのだらう。

きょうは、十月十六日。去年のきょうの日付けには、何もしるされていない。あすの日付けには、「午後六時から、処女会」とある。——去年（昭和五年・一九三〇年）のノートの部分は、やはり、赤鉛筆の「」でかこんで、ことしのふんと区別することにしよう。

* *
* *

処女会は、「工女組合」を中心につくられていた。「工女組合」は、小学校を卒業して、製糸工場や紡績工場へ働きにくくひとのために、小学校長が組合長になり、町長や、町の有力者が幹事になっている。わたしたちは、卒業期に、滝先生に、工女組合がどうしてつくられたか、どんな事業をするのか教わった。

*

工女組合は、組合員たる女工の品性を向上するとともに、その風紀衛生を保全し、ならびに、工場主——工女間の融和疏通をはかり、その間の利益を増進するをもって目的とす。——規約第二条。

*

工女組合は、組合の事業として、つぎのことをおこなう。

- 1 工女あつせん。
- 2 工女と工場主の契約の締結。その内容の検討と、履行の徹底。
- 3 賃銀未払いにたいする代理交渉。
- 4 帰郷のための交渉。

5 修養・矯風・慰安・保健につくす。

6 工場視察をおこなう。——規約第五条。

* *
* *

岐阜県の大野・益田両郡のばあい、工女組合は、世界大戦直後の大正八年（わたしが、小学校へいく前年）に、できた。いちばんはやい長野県では、世界大戦のはじまった大正三年（わたしの生まれた年）に、さいしょに、北佐久郡でできた。つづいてできた新潟、富山、山梨など、出稼ぎ女工の多い土地では、たいていは、その目的ずばり、「女工供給組合」とよんでいる。または、「労働保護組合」とか、「女工善導協会」などとよんでいるところもあった。

* *
* *

ふつう「処女会」というのは、青年団の女子部のことで、小学校を卒業して、上級学校へ進学しない青少年は、その町村の青年団へくりいれられた。それらの青年を対象に、学校の教員が指導する軍事教練の「青年訓練所」や、農閑期の冬の夜学「補習学校」の学習が開設された。「処女会」とは、おかしな呼び名だけど、「女工供給組合」と、はつきりいわれると、出稼ぎ休暇の女工たちが、恥かしがって集まってこないから、そう呼ぶのだろう。だから、「処女会」へは、会社づとめしているひと、家事手つだいのひとたちも、顔をだしていた。一週にいちど、夜六時から九時まで。女教師が裁縫や料理、作法、手紙文のかきかたなど教えている（わたしは、二回顔をだしただけで、あとは行っていない）。

* * *

1 みつ子の出発

その日杉戸家では、一家五人とも、朝の三時半におきた。

父の糸之助、弟の杉太郎がついていくほかに、ちさも、岡谷の^{やまに}全・並木久三郎製糸まで、みつ子を見おくることにした。四人は七錢ずつで計二十八錢になる汽車賃を、けんやくして歩いていくのだ。いっしょに、朝ごはんをすますと、まだうす暗いうちに家をでた。

街は、県道ぞいに、まだ、ひっそりと寝しづまっている。三百メートルほどいって、踏切にさしかかる。入一いっいちの大きな倉庫が、ぼんやり白くうかび、蝕くさばまれた赤い月が、倉庫のま上の西空にはりついていた。台風の前ぶれの黒い雲が、異常な速さでかすめとぶ。

ちさは、踏切で足をとめてふりむく。——と、そこに、ま新しい立札を見た。

△一寸お待ち、思案に余らば、母の家▽

このごろ、岡谷にあるキリスト教関係の社会事業団体がたてたものである。若い自殺者の多い踏切わきや、湖畔のところどころに、そんな呼びかけの立札が立っている。

ちさは、立札のさきのレールへ顔を向けずにはいられない。たしか、あのへんだった。……深い夏霧のあさ、車輪にだけ散った、赤と白のむごたらしい小花。その娘の肉片を見る気がした。

ちさは、走っていった。不吉な気配に、背すじが、ぞくんとする。みつ子に追いついて、肩をゆすぶる。

「月蝕よ、ほら」

——自分ではないから、かまわないのか。糸とりの生活へはいるのは、自分ではないから。みつ子は、あんなにも糸とり女工になりたがっていた。行きたくて行くのだから、かまわないというのか。食い扶持が、ひとり減る……わたしまで、単純に、ただそれだけで喜んでいいことなのか。

「ふうん、月蝕じゃって？」

みつ子は、ちらと空を仰いでみたきり、心はそこになかった。

——今、並木製糸は、三百釜というから、こちらへんの三十釜、五十釜の二等マユ製糸とは大ちがい。大工場といえるのだ。

——その工場で、わたしは、三時間後には、じぶんの釜をもらえるかもしれない……。

△製糸は、国内向けの糸をひく国用製糸だが、近いうちにフタバ式二十枠の多条繰糸機をすえつけるはずである。その機械は、この製糸工場街に多い、女工二、三十人から五、六十人ぐらいの中・小工場でつかっている明治以来の木製の四枠や六枠座繰機とは、ぜんぜんちがう。立って、冷水で繰糸するキカイだ。それは、紡ぎ車と感じの似た座繰機とくらべて、一目みただけで近代的な、はっきりとキカイの名に価する代物であった。

みつ子は、片貝組製糸や、グンゼ製糸の宣伝用絵はがきでしか見たことのないイシウイン式二十枠機を思いえがく。フタバ式二十枠繰糸機も、それをまねたキカイなのだろうか。

美しいアルミの二十枠の枠ならびや、ピアノのように黒くどっしりしたアングル台……それが、ずらりと、二、三百台も並んでいる工場の内部が目にくる。——軽快な白い作業

エプロン、白いズックのくつ。二十杵多条繰糸機の前になつて、この二つの指さきで、美しい音楽を弾くように、生糸を繰ることが出来る……考えるだけでも、足が弾んでくる。

土着資本の製糸工場では、百釜以上の規模でも、よほどの資力がないと、一台二百円以上もする二十杵の多条繰糸機に切りかえることはむずかしい。

多条繰糸機への切りかえの目的は、繰糸の機械的、合理的な大量生産化にあるので、それにつれて、生産工程のぜんたいから、工場内の各部門のいろいろの設備までを、すっかり切りかえて、生産システムを合理化しなければならぬ。そのため、とくに、多条繰糸機につける、女工たちを、三カ月から半年もかけて、新繰糸法に養成しなす。長い歳月を座繰機に馴染んできている年輩の女工たちでは、新しい二十杵のキカイには使いものにならない。そこで、みづぐらいまでの十代の低年令の女工をえらんで養成し直さねばならないから、人の問題も、たいへんである。

そのたいへんな、設備と人と、付随してくる莫大な金の問題を承知の上で、△並木久三郎は転換を考えているという。

この指……。みつ子は、日焦けした丸まっちい小さな両手をひろげてみる。この指がうごくのと、魔法にかけられたように、するするっと、白い生糸が高貴な光を放ちながら、マユつぶから二十杵へひきだされてくるのだ。

「なあ、な、父アま、△並木製糸でも、フタバ式二十杵へ転換したらきつと、スカートのついた作業服がもらえるな」

「おう、お。もらえるとも。それに、座繰の糸ひきさより、日に十銭もよけいに稼げるってい

うぞ、日に十銭も」

みつ子は、小石にもつまずきそうに、そわそわと歩く。少しの間も、しゃべったり笑ったりすることをやめない。糸之助も、上わずった上機嫌な声でこたえ、いちいち、相づちをうつ。倉庫の多い工場街、みつ子の甲高い笑い声が、前後に人通りがなく、しんとした軒並みの白い壁に、きんきん、ひびく。

ちさと杉太郎の一メートルまえを、そのみつ子と糸之助の二つの影が、のびたりちぢんだりして、うごいていく。

欠けたままの、いびつな月が、雲間からでてきた。

*

下諏訪の製糸工場街を出はざれると、やや明るくなってきた。小さな木橋を渡っていく。

「たしか、ここいらから長地村おさちじゃ」

杉太郎は、田圃の多い地帯をめずらしげにながめる。そして、さっきからいおうか、止そうか、と思っていたことを、用心ぶかく口にだした。

「ねえちゃん、長地のピオニール（赤色少年隊）を知ってる？」

「ピオニール？ ううん、どうして」

「ちさは、げげんそうに頭をふる。」

——ふうん、やっぱりな。ピオニールって、ロシヤ語やから、知ってるはずはないもな。

杉太郎は、内心ほっとした気持で、得意げな笑みをうかべる。

ピオニール——塩谷先生でさえ、そういう言葉で俺らにはいわなんだもな。

それを、転校してきたばかりの色白のひよわな生徒が嗅ぎつけたとも知らず、

——お前めたくと。長地小学校の子ども会の奴らを知つたら？ なかなか、しつかりしてるぞ。

下諏訪小学校高等科一年の受持の塩谷一夫は、そういった。よく日に焼けた顔。笑うと、白い歯ならびがむき出しになる。カニ、または平家ガニというあだ名の油絵のうまい教師だ。

うす青く明るみはじめた街道ぞいの畑や草原のなかに、工場の低い屋根がみえる。三味線花。ススキやカヤが生い茂っているなかに半ば埋もれている塀のこわれから、通りがけに、ちらつとのぞくと、そのなかにも、女工寄宿舎があった。

東の空の際きわから、さっと鋭い朱がほとぼしった。工場街のトタンの屋根がきらきら光り、そこから夜あけの空気がぱつとひろがって、うかびあがってくる。

目ざめ！ 遠い明治のむかしから、製糸工場街の白壁の軒々の、朝の目ざめは早い。林立する煙突群のなかから、一すじの煙が、うっすら、立ちのぼるのをあいずに、あっちこっちの煙突が競きりあって、くろい煙をもくもくと吐きだし、たちまち、湖畔の工場街はよみがえって活気づく。

表通りをさけて、近道をとっていくと、みちぞいに割長屋がつづいてる。古トタンに、むしろと板を、縄で結えつけただけの掛小屋に「祝出征」のノボリが、ひらめいている。

杉太郎は、ふりむいて、ちさにいった。

「政府は、戦争は南満だけの局地解決の方針やっていっとるになあ……」

「そんなら、兵隊ひっぱる必要はないろに」

「そりゃ、そうや。満洲の既得権益の自衛措置は、一応おわたたわけやでな、いま、日本軍は

南満の満鉄付属地に復歸しつつあるはずや……。日本政府は、國際連盟とアメリカの停戦勧告に、そうこたえとるって、いうぞ」

「それ、塩谷先生がいわはったの？」

「ちがう。教室の後ろの壁にはつてくれる新聞にそうかいてあった」

「信州新聞？ それとも」

「うん、毎朝新聞なんかもや。その切りぬきをして、生徒たちも壁新聞をつくって編集するの。そのほか、生徒が記事をつくって、はりつけてもいいんじゃない……社会のうごきがよくわかるいい壁新聞をつくろうと……。けど、ここんところ、みんな満洲やシナの記事ばかり、切りぬいてるんだ」

「そうね、男の子は、そのうち兵隊にとられて、いつてしまうのね……」

「う、う……」

杉太郎は、返事につまってしまう。教師の塩谷は——みんなの家にも、兵隊にいつている兄きや、おじさんがいるだべ……と、いつていた。しかし、杉太郎は、直接かんけないと思つていた。自分が兵隊にとられるなど思いもおよばないことだった……。

——そうか……先生は。そうか……なぜ、先生が、戦争の切りぬきなんかさせると思つたら……。

杉太郎は、そわそわ、足を早める。

歩いていくにつれて、道ぞいの古ぼけた家々が、目をさましはじめ。朝めしを炊く煙のでている、そのあっちの屋根、こっちの屋根の下に、長地おまち小学校高等一年の子どもらは、まだね